### 112.

611-018.13:616-003.811

# 濱崎氏耐酸性顆粒ノ實驗的生成 並ニ細胞核病理學知見補遺

第1篇 新鮮組織ノ無菌的保存法 其ノ1 「クローム・耐酸性顆粒」ト Feulgen 氏反應

岡山醫科大學病理學教室(主任田村教授)

**B**學士 助手 三 船 歡 一

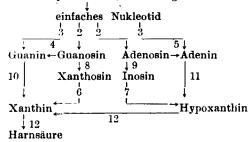
[昭和13年8月31日受稿]

#### 精 論

1891年 Salkowski ガ新鮮組織 F Organbrei トナシ腐敗 F 防ギ 37°C = 保存スル場合一定時間後ョリ蛋白分解ノ開始サルル F 認メ、コノ變化 F 彼ハ自家融解 = 依ルモノトシテ酵素ノ作用 = 鯖セシメタリ、其ノ後 Jacoby、Kraus、Goldmann 等ノ研究アリ、特 = Schmaus u. Albrechtハ自家融解 = 依ル核ノ變化殊 = 核消失ノ時間的關係 F 形態學的 = 肝、腎、心等 = 就キ可成詳細 = 檢索セリ、併シナガラ彼等ノ檢索ハ主トシテ「ヘマトキシリ

ン」核染色=依ル純形態學的研究=止り、當時ハ研究法ノ不備ナリシタメ Nucleoproteide =對スル酸素作用=依ル核ノ組織化學的變化ハ明カニスルヲ得ザリキ. 之=對シ Levene ハ核蛋白ガ自家融解酵素即チ Polynucleotidasen, Nucleotidasen, Nucleotidasen, Nucleosidasen 等=依リテ自家融解階程ヲ辿ル場合ハ, Nucleoproteide ガ freie Basen =至ルマデ分解サルコトヲ明カニセリ. 更=S. Amberg u. W. Jones =依レバ Nucleoproteide ヲ分解スル酸素ノ作用ヲ次ノ如ク

Polynucleotid (zasammengesetzte Nukleinsäure)



- 1. Nuklease (z. B. Tetranuklease)
- 2. Phosphonuklease
- 3. Purinnuklease

Nucleotidasen

Nucleosidasen

- 4. Guanosinhydrolase
- 5. Adenosinhydrolase
- 6. Xanthinhydrolase
- 7. Inosinhydrolase

- 8. Guanosindesamidase
- 9. Adenosindesamidase
- 10. Guanase)

Purindesamidase

- 11. Adenase
- 12. Xanthinoxydase.

(但,一定番號ノ酵繁ハ前配 Nucleotid 分解) 過程中當該番號ノ部ニ於テ作用スルモノトス) schematisch = 記載セリ、併シ總テノ種類ノ細胞 = 一様 = 斯ル酵素全部ガ含有サル可キニ非ズ、久 其ノ合量 = 差異アルベキハ勿論ナリ、

**次=濱崎氏=依レパ「クローム・耐酸性顆粒」及ビ** 鋼・、汞・耐酸性顆粒ハ夫々遊離核酸、Purinmononucleotide 並 = Nucleoside 及ビ Purinbasen ヲ主成分トナス. 又同氏ハ Feulgen 氏反應ノ本態 = 就テ研究シ Feulgen ノ Nuclealreaktion = 反 腹スルモノハ Proteinト結合シテ存スル Nucleinsăure ナルコトヲ明カニセリ. 卽チ Feulgen 氏反 應及ビ密崎氏ノ諸種耐酸性顆粒 ヲ以テスレパ, Nucleoproteide, Nucleinsäure 及日 Purinderivate ノ主要物ヲ組織化學的ニ證明シ得ル理ニテ, 氏へ更=杉山氏法ヲ改良シテ Brillant Azurin-B. ニョル Histon 證明法ヲ添加シ兹ニ核蛋白代謝ノ 系統化サレタル組織化學的研究法 9 發表シ, 以テ 沈滯セル細胞核病理ノ賦活ヲ企費セリ、余ハ溶蝣 氏ノ Idee = 從ヒ古來核病理=對スル古典的研究 トシテ知ラレタル新鮮組織無菌的保存法ヲ行ヒ、 之=上記組織ノ化學的研究法ヲ施シテ, 主トシテ 組織内酵素 = 依ル Nucleoproteide ノ分解階程ト 前記3種ノ耐酸性顆粒(後2者ハ次篇ニ於テ述ブ べシ) ノ消長トノ關係ヲ實驗的ニ追及シ, 更ニー **般核病理學=關シテ聊カ知見ヲ補遺スル所アラン** ١ *٨.* 

#### 實驗方法

實驗動物ハ平素豆腐槽ニデ網袋セル2 kg 前後 ノ健康ナ家兎ヲ用ヒ、 展殺直後ニル、脾、淋巴腺、 胃,肝,胃ノ諸臓器ヲ無菌的ニ取リ出シ、 滅菌セル Dose ニ入レ同時ニ滅菌水ヲ含マセタル綿球ヲ直 接組織ニ觸レザル様傍ニ挿入シテ臓器乾燥ヲ防ギ ナガラ之ヲ貯ヘタリ・第1列實験ニ於テハ3 例ヲ 0°, 22° 及ビ37°Cニ夫々保存シ8時間毎ニ「クロー ム」銅及ビ汞固定法ヲ施セリ・第2列實驗ニ於テハ 時間的關係ヲ更ニ精細ニ檢センガタメ3 例ヲ 37°C ニ於テノミ保存シ4時間毎ニ固定シ、同時ニ尚ホ 類脂體トノ關係ヲ明カナラシメンガタメ Ciaccio 固定法ヲ併セ行ヘリ. 染色法トシテハ濱崎氏ノ考案=掛ル「クローム」,銅及ビ汞耐酸性顆粒證明法及ビ Feulgen 氏法ヲ用ヒ,尚ホ對照染色トシテBaryt水分別後「石炭酸フクシン沃度法」ヲ行ヒタリ.其ノ他 Ciaccio 染色及ビHämatoxylin-Eosin 染色法ヲモ併セ行ヒタリ.

#### 實驗成績

以下第1列,第2列實驗ヲ各臟器=就キ各時間 溫度=於テ,其ノ鏡檢所見=ヨリ總括的=雄ブレ バ次ノ如シ、先型類囘=用フル術語ハ文章ノ繁雜 ヲ避クルタメ,次ノ如キ略語字ヲ用フコトトス。 即, Cr.Sf.Gr.(「クローム・耐酸性顆粒」), Sf. Subst. (耐酸性物質), F.R. (Feulgen 氏反應), H.-E. (Hämatoxylin-Eosin 染色), 0°C/8 St. (0°C 中= 8 時間放置) 等ナリ.

心臓. 直後. F.R. 心筋繊維ノ核ハ核膜及ビ Chromatinstränge 共三淡ク呈色ス. コレ三反シ 間質ノ核ハ旱色可成著明ナリ. Cr.Sf.Gr.ハ 0.5— 2μ 多クハ 1μ 前後ノ類圓形乃至ハ稜角性ノ顆粒 筋漿中=瀰漫性=散在シ, 一部ハ核膜=接シテ存

37°C/4 St. F.R. 核ノ呈色直後ョリ稍々著明. Cr.Sf.Gr. 一部ノ顆粒が増大シ往々4一6μニ達スル類圓形又ハ滴狀ノ顆粒アリ. 住々核中ニモ出現
ム. H.-E. 著變ヲ見ズ.

の°C/8 St. F.R. 星色稍々減弱ス. Cr.Sf.Gr. ハ直後ニ比シ可成増加シ, 一部ノ顆粒ハ淡明化セル核中=モ認メラル、H.-E. 著攀ヲ見ズ.

22°C/8 St. 大體 37°C/4 St.°=類似ス.

37°C/8 St. F.R. 心筋核膜附々機ク内容淡紫紅色 =染ル、間質ノ核濃染ス、 Cr.Si.Gr. 0°C/8 St. ョ リモ細小ナル Si.Gr. ノ増加著明ナリ、「プルキン エ繊維」ハ正常時ニ於テ Sf.Gr. 甚ダ少数ナルガ, 本質驗=際シテモ顆粒ノ増加ヲ殆ド見ズ、 H.-E. 心筋ノ核稍々淡明化セルモノアリ。 37°C/12 St. F.R. 稍々書明=反應ス. Cr.Sf.Gr. 27°C/S St. =比シ細小ナル顆粒ハ稍々署明=減少シテ,心筋繊維ノ邊線部=2-1μノ租大ナル顆粒増加ス. 一般= Sf.Gr. ハ多少耐酸性ヲ減ゼルヤノ感アリ. 尚未 Endoplasma 及ビ核内= 3-4μ大ノ小塊狀ノ Sf.Gr. 出現ス, 前者モ恐ラク核ト一定ノ關係=アルモノノ如シ. H.-E. 間質ノ核稍々萎縮シ, 筋核多少膨大シ淡明ナルモノアリ.

6°C/16 St. F.R. 22°C/8 St. =類似. Cr.Sf.Gr. 0°C/8 St. = 比シ微細ナル顆粒ノ消失著明ニシテ比較的大ナル顆粒稍々多シ. 乍併, 筋核及ビ Endoplasma 内= Sf.Gr. 集積シテ半バ相癒合シテ塊狀 ヲナスモノアリ. H.-E. 著墾ヲ認メズ.

22°C/16 St. 37°C/12 St. = 類似.

37°C/16 St. F.R. 37°C/8 St. =類似ス. Cr.Sf.Gr. ハ 37°C/8 St. = 比シ可成減少シ且稍々細小ニシテ其ノ耐酸性ヲ減ジ換色不鮮明=現ハルモノ多シ・←般=顆粒ノ消失ハ紡繊維ノ中軸部=多ク起リ邊縁部=ハ猫 ホ粗大ナルモノ散在ス.「パリツト水」分別=依リ一部ノ顆粒ハ消失 ヘルモ, 一部ノモノハ尚ホ其ノ輪廓ヲ止メ, 又一部ノモノハ旱色性ヲ變ゼザルモノアリ. H.E. 間質ノ核ハ蓍シク萎縮シ心筋ノ核次明=シテ核融解=傾ク.

37°C/20 St. F.R. 前者ョリ稍々減弱,併シ一部 =於テハ核消失=陥リ全ク星色セザルモノアリ. Cr.Sf.Gr. 心筋繊維中ノ Sf.Gr. ハ互= 相合シテ 3一4μョリ数μノ租夫ナ顆粒トナリ心筋繊維ノ邊 株部=散在スルモノ多シ. 顆粒ノ多クハ「パリツ ト水」分別=テ消失セズ. H.-E. 37°C/16 St. =類 似.

0°C/24 St. F.R. 比較的署明=反應ヲ呈ス. Cr. Sf.Gr.ハ盐ダ蓍明=減少ヲ來シ且其ノ耐酸性ヲ減 ジテ惣界不鮮明ナリ. 乍併, 核及ビ Endoplasma ノ部=ハ比較的組大ナル 2-3 μ ノ顆粒存シ特= 核内ノモノハ明瞭ナリ. H.-E. 22°C/16 St. = 類似. 22°C/24 St. F.R. 星色可成減弱ス. Cr.Sf.Gr. 1 μ 前後ノ顆粒筋漿中ニ散在シ,顆粒ハ一般ニ耐酸性 ヲ減シ、「パリツト水」分別ニ依ル所見ハ昇色性ヲ 減弱スルニ止ルモノ多ク類脂體吸着ヲ思ハシム。 H.-E. 心筋ノ核ハ淡明化シ核素融解ニ傾ク。

37°C/24 St. F.R. 呈色著明=減弱シー部例=於テハ消失ス. Cr.Sf.Gr.ハ減少最モ著明=シテ特=切片ノ邊棒部=於テハ Sf.Gr. ハ全然出現セズ. 唯其ノ筋漿ガー様=瀰漫性淡紫色=染ルヲ見ルノミ.「パリツト水」分別ヲ行フ=過半数ノ Sf.Gr. ハ著明=星色シ,殊=組織邊棒部ノ少数ノ不整粗大顆粒, 其ノ他一般=圓形ヲ呈セル顆粒ハ星色强シ. 37°C/16 St. 或ハ 22°C/24 St. =於テ認メラレタルガ如キ星色ヲ減弱スル Sf.Gr.ハ甚ダ少シ. Ciaccio氏染色ヲ行フ=斯カル顆粒ハ橙赤色ヲ呈ス. H. E間買ノ核著シク萎縮シ心筋ノ核モ亦萎縮シ境界朦朧トシテ而モ稍々淡明=染ルモノ多ク組織切片邊株部=於テハ核消失=陷レル部モアリ.

37°C/30 St. F.R. 殆ド切片全體=於テ反應消失

ス. Cr.Sf.Gr. モ殆ド消失シ,切片ノ全體=於テ筋

漿ハ瀰漫性淡紫紅色ヲ呈シ,極ク一部=於テノミ
筋繊維ノ Q- 顆粒 (Holmgren) = 相當シ 0.5―2 μ

類圓形ノ顆粒數簡連續性=存スルモノアリ、「パリ
ット」水分別=テ其ノ呈色性ヲ亢進スルヲ見ル.

脾臓. 直後. F.R. 濾胞ノ淋巴球ハ其ノ核膜及ビ核染色質共ニ美麗ニ紫色ヲ皂ス. コレニ反シ造淋巴細胞,網狀織細胞,脾髄細胞及ビ寶內皮細胞ナドノ核ハ稍々呈色弱シ. Cr.Sf.Gr. ハ濾胞ニハ治ド認メラレズ. 腫大セル網狀織細胞内ニハ比較的稀ニ弱耐酸性類脂體稍々瀰漫性二散在シ爲ニ胞體境界不鲜明ナルモノアリ. 赤色脾髄ノ脾髄細胞ニハ1—3中大ノ類圓形ノ Sf.Gr. 2—3 箇ヨリ數箇合有スルモノ中等數ニアリ. 尚本脾實內皮細胞ニモ 0.5—1中大ノ紡錘形或ハ類圓形ノ顆粒 2—3 箇其ノ核ノ周圍, 特ニ兩端ニ位置スルモノ可成多数アリ. 尚本腫大セル組織球性細胞及ビ網狀機細胞ニハ上記ノ濾胞ノ夫レニ類似スル所見ヲ呈スモノアリ. 又血管壁ノ內皮細胞ニモ 0.5—1中大ノ類圓形

ノ顆粒 1-2 箇存在ス. 又脾材 = 於テモ斯ル顆粒ヲ 見ル.

37°C/4 St. F.R. 赤色脾髄及ビ濾胞ノ一部ノ細胞ハ一般=稍々呈色弱シ、濾胞淋巴球ノ一部ノモノハ稍々核濃縮=傾ク、尚ホ核壁核素増多症核ノ分裂破壊ヲ起シ呈色甚ダ弱キ核質ヲ見ル、Cr.Sf.Gr. 大體 0°C/8 St. =類似スルモ 一般=其ノ数稍々少数ナリ、H.-E. 一般=核素分離稍々著明ナリ、

の°C/8 St. F.R. 大體 37°C/4 St. = 類似. Cr.Sf.Gr. 濾胞ノ Sf.Gr. ハ増加著シカラザルモ, 赤色脾髄 及ビ被膜等ノ顆粒ハ可成増加ス. H.-E. 濾胞周邊 部ノ赤色脾髓=少數ノ核膿縮=傾クモノ散在ス.

22°C/8 St. F.R. 淋巴球ノ少數ノ核稍々萎縮ン瀰漫性=濃染ス. 又核壁素増多症及ビ核壁競芽ヲ起セルモノアリ. 何レノ核素モ稍々濃紫色ヲ呈ス. Cr.Sf.Gr. 大體前者=類似. 併レ, 濾胞淋巴球ノSf.Gr. 可成増加シ, 1—2 μ大ノ類圓形又ハ新月形ノ顆粒核膜=外接シ其ノ一部ハ核中 = 現ハル. 尚ホ組織球性細胞ノ耐酸性類脂體モ尚ホ増量ス. H.E. 大體前者=類似ス.

37 C/8 St. F.R. 脾組織ノ各種細胞ノ核ハ一般 ≥ 萎縮濃染シ,網狀織細胞ノ核ハ淡明化シ,淋巴球 ノ核ハ萎縮シテ星色稍々强シ. Cr.Sf.Gr. 濾胞 = 於ケル Sf.Gr. ハ大イ=増加核膜ニ接シ小帽狀ヲ ナスモノ多ク又核中ニモ多数アリ. 赤色脾髄ハ濾 胞ニ比シテ顆粒ノ増加著シカラズ. 尚ホ被膜ノ結 締織細胞中ニモ微細ナ顆粒少數出現セリ. H.E. 脾組織ノ各種細胞ノ核ハ著明ニ核酸解=陥リ瀰漫 性ニ汚臓涸濁シ,尚ホ濾胞中心部及ビ赤色脾髄= 於テハ核消失著明ナリ.

37°C/12 St. F.R. 大體前者=類似. Cr.Sf.Gr. 特 戸湖胞=於テ Sf.Gr. 大イ=増加増大ス. 一般= 組織切片ノ中心部ノ顆粒, 特ニ赤色脾磁ノ顆粒ハ 稍々細小ナリ. 併シ被膜下組織ノ顆粒ハ比較的粗 大ナリ. H.-E. 大體 37°C/8 St. =類似シ稍々變性 强シ.

0°C/16 St. F.R. 0°C/8 St. =類似. Cr.Sf.Gr. 大

1 22°C/8 St. = 類似ス, 尚ホ網狀繊細胞ノ Sf.Gr. ハ増加シ核ヲ厳ヒ現ハルモノアリ. H.-E. 0°C/8 St. = 類似.

22°C/16 St. F.R. 37°C/8 St. ョリ變化ノ程度稍 稍輕度オリ. Cr.Sf.Gr. 37°C/8 St. =比シ濾胞ノ 顆粒ハ一般=稍々粗大ナリ. 併シ赤色脾髄=於テ ハ顆粒ハ稍々減少シ且其ノ耐酸性ヲ減ジテ暑色性 稍々弱シ. H.-E. 核機縮及ビ核壁核素増多症著明, 網狀織細胞ノ核ハ多クハ核消失=陥ル.

37°C/16 St. F.R. 脾濾胞ノ淋巴球及ビ各淋巴細胞ノ核ハ萎縮機染スルモ其ノ多クハ輪廓著明ナラズ、脾髄細胞及ビ寶內皮細胞ノ核ハ多数星色性ヲ消失セリ,其ノ星色性残存セルモノハ核萎縮ニ陷リ稍々凋濁ス. Cr.Sf.Gr. ハー般=星色弱ク淡紫色境界不明瞭ト化ス. 其ノ間稍々多数ノ微細ナル小高狀ノ境界著明ナル顆粒在スルモ, 其ノ形態ョリシテ耐酸性類脂體= 関スモノナリ. 尚本組織球性細胞ノ Sf.Gr. 及ビ類脂體モ可成減少シテ腫大セル胞體中=瀰漫性=散在ス. 一般=濾胞及ビ脾材等ハ瀰漫性=稍々耐酸性ヲ得テ決紫紅色=染ル. H.-E. 總テノ細胞核ハ瀰漫性=汚酸暗青色=染リ,核濃縮=傾ケルモノト核酸解=傾ケルモノト複酸解=傾ケルモノト提在ス. 網狀織細胞ノ核ハ消失=陷レルモノ多

37°C/20 St. F.R. 切片邊線部二於テ核消失二陷 レル部多ク, 呈色性ヲ保有セル核ト雖モ其ノ色調 甚ダ淡明ナリ. Cr.Sf.Gr. 濾胞及ビ脾ಟ二於テ一般 ニ 37°C/16 St. ヨリ顆粒ハ更ニ減少シ網狀織細胞ノ 胞體中ニ 0.5---1μ「パリツト水」分別ニテ消失セザ ル類圓形ノ顆粒數箇存在ス. H.-E. 37°C/16 St. ヨ リ更ニ核ノ變性强シ.

0°C/24 St. F.R. 22°C/8 St. = 類似ス. Cr.Sf.Gr. 耐酸性顆粒ハ大イ=減少シ脾濾胞=於テハ顆粒ハ殆ド認メラレス. 又中心動脈及ビ脾材等=於テモ然リ.併シ赤色脾髓=於テハ比的較粗大(2μ前後)ナル類圓形ノ顆粒體ホ比較的多数殘留ス. 其ノ過半数ハ形態的=耐酸性類脂體=一致ス. H.-E. 白

色脾髓及ビ赤色脾髓ノ核壁核素増多症、核濃縮、 核融解=陷レルモノ可成多数アリ.

22°C/24 St. F.R. 濾胞淋巴球ノ核ハ稍々溷濁シ, 瀰漫性ニ星色スルモノ多ク,謚ノ質細胞ノ核一般 = 稍々腫大シ淡明ナリ. Cr.Sf.Gr. 大體 22℃/16 St. =類似ス. 赤色脾髄ノ一部ニ於テハ猶ホ多數ノ顆 粒存スル部アレド形態學的ニ耐酸性類脂體ニー致 スルモノ多シ、 H.-E. 37°C/8 St. = 類似ス. 尚ホ 不明瞭ナガラ核素分離ヲ見ル.

37℃/24 St. F.R. 一般ニ組織細胞ノ核ノ呈色大 イニ減弱ス. Cr.Sf.Gr. ハ大體前者ニ類似シ脾濾 胞ニハ 徽細粉末狀ノ 顆粒可成多数瀰漫性 = 散在 ス.「ベリツト水 )分別ニテ斯カル顆粒ノ殆ド全部 ハ消失セズ, 極ク一部ノ微細ナ顆粒ノミ消失ス. 「チアチオ染色」ニ依り上記顆粒ハ一般ニ橙赤色ニ 染り、尚ホ腫大セル網狀織細胞ノ胞體中ニモ微細 ナル顆粒ヨリ數 μ ニ達ス橙赤色ニ染ル顆粒 2--3 或ハ数箇含有スルモノアリ、併シ心臓=於ケルガ 如ク「ズダン嗜好性」著明ナラズ、H.-E. 各種組織 瀰漫性=汚穢青色=染ル、稀=核素分離ヲ認メシ ムル細胞核アリ.

37°C/30 St. F.R. 脾組織ノ核ノ星色性殆ド全ク 消失ス. Cr.St.Gr. モ亦殆ド全ク消失シ切片ノ處々 = 統狀 = 網狀繊細胞ノ胞體中 = 1-3μ類圓形ノ 耐酸性類脂體顆粒數簡存スルモノ散在スルノミ・ 本顆粒ハ「パリツト」水分別ニテ其ノ呈色性ヲ變ゼ ズ 尚ホ被膜下組織ニモ 2-3μ小滴狀ノ 顆粒浸潤 性=散在ス.

直後. F.R. 及ヒ Cr.Sf.Gr. 腸間膜淋巴腺. 脾ノ直後例ニ類似ス.

0°C/8 St. F.R. 直後例=類似ス. Cr.Sf.Gr. 前者 ョリ皮髄兩質=於テ Sf.Gr. ノ多少ノ増加ヲ認ム ルノミ、H.-E. 略ぶ直後ニ類似シ蓍變ヲ見ズ.

22°C/8 St. F.R. 胚中心ノ淋巴球核ハ稍々萎縮シ テ濃染シ,且網狀織細胞ハ稍々淡明化ス.Cr.Sf.Gr. 前者ニ比シ餘り増加セザルモ、醯質ニ於テハ微細 粉末狀ノ Sf.Gr. 及ビ 0.5-1 μ 圓形ノ耐酸性類脂 體瀰漫性ニ胞體中及ビ細胞間ニ多數散存ス、又腫 大セル網狀織細胞ハ耐酸性類脂體ヲ有スルモノ多 ク,「バリツト水」分別ニテハ髄質ニ於テ其ノ呈色 性ヲ變ゼザルモノ多數散在ス. 又網狀織細胞ノ胞 體中ニモ斯カル顆粒多数アリ. H.-E. 皮髄兩質ノ 組織細胞核ハ輕度ノ濃縮ヲ起セルモノ多ク、又網 **狀織細胞ノ核ハ小塊狀變性ヲ起セルモアリ. 又一** 部ノモノハ核融解、核消失ニ陷ル、

37°C/8 St. F.R. 胚中心ノ淋巴球核ハ 濃縮ニ 傾 キ. 又一部ノモノハ核融解狀又核分離狀=現レ其 ノ境界甚ダ不明瞭ナリ、 髓質ノ淋巴球核ハ濃縮ニ 傾き溷濁濃染スルモ、網狀織細胞ノ核ハ淡明ナリ. Cr.Sf.Gr. 從前=見ラレタル 粗大稜角性ノ Sf.Gr. ハ減少シ, 部分的ニハ顆粒ノ蓍減ヲ起セル部アリ. 併シ又一部ニ於テハ大體前者ニ類似スル組織像ヲ 保有スル處アリ、併シ濾胞ノ邊緣部及ビ髓索, 脾 竇ノ淋巴球, 單核細胞及ビ網狀織細胞ニハ甚ダ美 麗ナル 0.5μ大ノ Sf.Gr. 多数出現ス. 油浸ニテ檢 細胞ノ大部分ハ核消失ニ陷リ核素ハ組織ニ浸潤シ ・ スルニ顆粒ハ核膜ノ内外ニ發生シ,漸次核膜ヲ離 レテ腕體中へ移行スルヲ見ル. H.-E. 皮髓兩質ノ 網狀織細胞核ハ核融解ニ傾ケルカ又ハ核消失ニ陷 ルモノ多シ。

> 0°C/16 St. F.B. 皮髄兩質 / 各種細胞 / 核ハー 般ニ上記ノモノヨリ更ニ稍々濃染ス。 Cr.Sf.Gr. 胚中心=於テハ Sf.Gr. 全ク認メズ. 髄質=於テ モ 1-2μ類圓形ノ顆粒 0°C/8 St. ョリ可成減少ス. 併シ腫大セル網狀機細胞ノ耐酸性類脂體極メテ多 量ニ出現シ、其ノ胞體ヲ充セルモノ數簡ツツ群在 ム. H.-E. 0°C/8 St. = 類似シ署變ナシ. "

> 22°C/16 St. F.R. 大體 22°C/8 St. ヨリ稍々其ノ 是色弱シ. Cr.Sf.Gr. 皮髓兩質ノ所見大體 37℃/8St. =類似ス. H.-E. 淋巴球ノ核ハ一般ニ瀰漫性汚穢 暗青色ニ染リ、 網狀織細胞ノ性狀ハ 37°C/8 St.ニ 類似ス.

> 37°C/16 St. F.R. 融質ノ大部分ノ細胞核ハ消失 ニ陷ル. 尚ホ殘存セルモノ及ピ胚中心ノ各組織細

胞ノ核へ比較反應强シ、 Cr.Sf.Gr. 組織全般=亙 リ核ノ輪廓不明トナリ、 胞體中= 0.5—2 μ 大稍々 稜角性ノ Sf.Gr. 多數=出現ス、 尚ホ細胞境界モ 不明瞭トナリ、 殊=胚中心ノ如ク細胞密=存スル 所=於テハ然リ、組織切片邊緣ノ處々デハ Sf.Gr. ハ融合シテ租大商狀ヲナスモノアリ、 併シ 1 例 ニ 於テハ顆粒大イ=減少シ、 前例=認メタルガ如キ 核ト密接ナル關係=アル微細粉末狀ノ顆粒ハ最早 現ヘレズ、 細胞體間=ハ到ル處= 微細滴狀ノ 耐砂 性類脂體顆粒多数=散在セリ、 斯カル顆粒ハ「ベ リツト水」分別=デ消失セズ、 H.-E. 胚中心ノ淋 巴球ノ核ハ瀰漫性汚織暗青色=染ル、 爾餘ノ部珠 ニ 粒質ハ核殆ド染ラズ壊死=陷レリ、 尚ホ 1 例 ニ 於テハ核素分離ヲ起セルモノアルモ其ノ組織像左 程著明ナラズ、

22°C/24 St. F.R. 22°C/16 St. = 類スル所見アルモ核ノ變化輕度ナリ. Cr.Sf.Gr. 22°C/16 St. = 比シ顆粒ハ一般=稍々細小ナリ. H.-E. 大體37°C/16 St. = 類似.

37°C/24 St. F.R. 大部分=於テ 37°C/16 St. = 比シ核消失=陥レルモノ遙=多ク, 殘存セル胚中 心組織ノ各細胞核ハ境界朦朧トシテ比較的淡明ナ リ. Cr.Sf.Gr. 組織邊緣部=ハ耐酸性物質ノ浸潤ア リテ組織像不明瞭ナル部アルモ, 爾餘ノ部ニ於テ ハ細胞核ハ腫大シ核内容ハ淡明化シ、核膜ノ部= 多数ノ Sf.Gr. 羅列ス. 顆粒ハ 0.5-1μノ圓形境 界明瞭ニシテ外形ハ「ミトコンドリア」ヲ思ハシム ルモ, 排列狀態ニ於テ異ナル. 網狀総細胞ノ耐酸 性類脂體モ蓍明ニ紫染セリ. 俳シナガラ他ノ1例 ニ於テハ胚中心ニハ全ク Sf.Gr. ヲ認メズ, 甚ダ 淡明化セル核の輪駆ノミヲ認メシム. 胚中心ノ邊 **徐部ニハ微細小流狀ノ類脂體顆粒細胞間ニ多数出** 現シ、脳質ニ於テハ核、細胞ノ境界全ク不明トナ リ、瀰漫性ニ大小ノ耐酸性類脂體小滴甚ダ多数出 現セリ、H.-E. 極ク一部ノ淋巴球ノミ暗青色他ハ 壊死ニ陷ル.

胃. 直後. F.R. 腺上皮及ビ筋層ナドノ核ハ

核膜及ビ「クロマチン絲」共ニ輕度ニ淡紫紅色ヲ呈 ム. Cr.Sf.Gr. 胃底腺上皮中ニ 1—3μ形甚ダ不規 則ナル Sf.Gr. 中等数ニアリ. 一部ハ核膜ニ密着 シ又稀ニ核内ニモ微細ナル顆粒ヲ認ム.

37°C/4 St. Cr.Sf.Gr. 一部ハ中空性=現レ, 又胃 腺上部ョリ腺底部=至ル=從ヒ漸次減少ス.

0°C/8 St. F.R. 著變ナシ. Cr.Si.Gr. 大體直後ノ モノニ類似ノ所見ヲ示ス. H.-E. 著變ナシ.

22°C/8 St. F.R. 著變ナシ. Cr.Sf.Gr. 胃腺上皮ハ壁細胞,主細胞/別ナク. 又核及ビ胞體ハ共ニ瀰漫性=紫染ス. 殊=主細胞/胞體中ニハ 2─4μ小塊狀=濃染スル 惣界明瞭ナ Sf.Gr. 多数存シ,屋々核内=巨大ナル Sf.Gr. 1 簡ヲ有スルモノアリ. 又顆粒ハ核端ヲ厳ヒテ存スルアリ. H.-E. 著變ナシ.

37°C/8 Sf. F.R. 一部ノ壁細胞ノ核鞘・濃縮シ呈色弱シ、 Cr.Sf.(fr. 前者=類スルモ其ノ数稍々多ク, 且大サ大ナリ(2一9 μ). 顆粒ハ主細胞=多ク核ヲ蔽ヒテ存スルモノ、原形質中=横ハルモノ或ハ耐酸性物質トナリテ細胞間=存スル等, 位置ハー定セズ、 筋層= 1一2 μ ノ顆粒中等数=アリ、H.-E. 中等数ノ壁細胞核ハ濃縮=傾ク、

37°C/12 St. F.R. 前者ョリー般=稍々反應弱シ. Cr.Sf.Gr, 22°C/8 St. =類似.

0.C/16 St. F.R. 大體 0.C/8 St. = 類似. Cr.Sf.(ir. 22°C/8 St. = 稍々類似ス. H.-E. 主細胞ノ核素融 解アリ, 其ノ胞體ハ瀰優性= 着染ス.

22°C/16 St. F.R. 主細胞 / 核ハ核 融解 = 傾キ淡明ナリ、壁細胞 / 核ハ甚ダ稀 = 濃縮シテ星色著明ナルモノアリ、 Cr.Sf.Gr. 腺上皮ノ顆粒ハ相互 = 相合シテ不整形ノ塊トナリ、 深部 = 至ル = 從ヒテ減少ス、 H.-E. 壁細胞 / 核濃縮著明 = シテ 4—5 以大暗青色 図形又ハ卵 関形ノ小體ト化ス、主細胞 / 核ハ核酸解更 = 進ミ核ノ輪廓甚ダ不明瞭ナリ、

37°C/16 St. F.R. 壁細胞ノ核ハ濃縮セルモノハ 昆色張キモ色鮮男ナラズ, 又主細胞及ビ固有層ノ 細胞核ハ星色一般ニ不良ナリ. Cr.St.Gr. 37°C/8 St. ニ類似スルモ顆粒ノ数稍々多ク且粗大ナリ・顆粒ハ珠=形不整ニシテ、「ミェリン形」ヲナスモノ多ク又絲狀ヲ呈スモノアリ、共ノ過半数ハ粗大ナ顆粒ト連絡アリ.筋唇ニハ1─2μ類間形ノ顆粒多数存ス、粘膜ノモノニ比シテ呈色强カラズ. H.E. 前者ヨリ更ニ變性ノ度蓍シク、主細胞ノ核ハ一般ニ核素融解ヲ起シ胞體ニ径潤シテ汚微暗青色ニ染ル

37°C/20 St. Cr.Sf.Gr ハ前者ョリ可成減少スルモ, 腺體ノ深部ニ於テハ猶ホ中等數三殘留ス.

0°C/24 St. F.R. 0°C/8 St. ョリー般 = 星色減退 ス Cr.Sf.Gr. 22°C/8 St. = 類似ス. H.-E. 0°C/16 St. = 類似ス.

22°C/24 St. F.R. 22°C/16 St. = 比シ壁細胞其ノ他ノ各組繊細胞ノ核ハ星色弱ク色調不鮮明ナリ、Cr.Sf.Gr. 37°C/16 St. = 類似シ「ミュリン形」、絲狀ノ顆粒ヲ認ム、筋層=ハ顆粒甚ダ少シ、 H.E. 37°C/16 St. = 類似.

37°C/24 St. F.R. 大部分 / 粘膜上皮 / 核ハ消 失ヲ來シ, 一部ニ於テハ核循 \* 殘存シ, 瀰漫性・ 稍々强ク呈色ス. 筋耐ノ核ハ濃縮シ稍々濃染ス. Cr.Sf.Gr. 切片ノ過半部ハ拭ヘル ガ如ク顆粒消失 シ、爾餘ノ部ニ於テハ主細胞中ニ從前認メラレシ 組大ナ顆粒ハ消失シ、1-2μ類圓形又ハ小塊狀ノ 比較的均整ナル 顆粒壁細胞及ビ 主細胞中 ニ出現 A. 顆粒ハ原形質中=平等=分布サレ「ミトコン ドリア・トノ關係ヲ思ハシムルモ、所々壁細胞及 ビ主細胞ノ核ガ耐酸性變化ヲ起シ,顆粒狀ニ現レ, 核膜ノ消失ト共ニ Sf.Gr. ノ原形質中=散布サル 像ヲ明カニ見ル、 H.E. 粘膜ノ深部ニハ猶ホ可成 多数ノ核ノ農染セルモノ存スルモ「石炭酸フクシ ン沃度法」ニテ呈色セズ、之等が核破壞又ハ核融 解=移行セントスル際=, 上記ノ如キ核ノ耐酸性 崩壊ヲ起スモノナリ,

37°C/30 St. F.R. 前者ョリ核ノ呈色更ニ減弱ス. Cr.Sf.Gr. 腺上皮細胞ノ Sf.Gr. ハ一部ニ於テハ殆 ド全ク消失シ、久一部ニ於テハ 0.5一2世類関形ノ

耐酸性類脂體顆粒中等数=存シ、「バリット水」分別=テ其ノ呈色性ヲ亢進ス.

肝臓. 直後. F.R. 肝細胞ノ核=於テハ核膜 紫紅色=現ルルモ、核素ハ星色弱シ. 尚本星芒狀 細胞ハ瀰漫性=稍々濃染ス. 又膽管上皮及ビ「グ リソン氏鞘」ノ結締織細胞核ハ紫紅色=美麗=星 色ス. Cr.Sf.Gr. 肝細胞索ノ中軸部= 0.5—1 μ大ノ 耐酸性顆粒 2—3 箇散在ス. 尚 ホ 稀=星芒狀細胞 ノ核ノ爾端=上記同様ナ顆粒 1—2 箇存スルモノ アリ.

37°C/4 St. F.R. 前者=類似スルモ濃縮セル星芒 狀細胞核散在シ星色著明ナリ. Cr.Sf.Gr. 肝細胞 核ノ少数=ハ核内=塊狀ノ粗大ナル顆粒ヲ有スモ ノアリ. 又核膜=外接シテ顆粒ヲ認ム他カ胞體中 = 0.5—2 μ 稜角性ノ顆粒ヲ中等数=認ム. 尚ホ肝 毛細管内皮下=ハ粗大塊狀又ハ「ミエリン形」ヲナ ス Sf. Subst. 所々=出現ス. 斯カル顆粒及ビ物質 ハ主トシテ肝小葉ノ浚練部=出現ス. 尚ホ膽管上 皮ノ Sf.Gr. モ稍々増加セリ. H.-E.肝細胞核=核 素分離ヲ認メ, 又核質涌出ヲ示スモノ多シ. 涌出 滴ノ一部ハ不整形一部ハ牛月形, 曲玉形等ヲ呈ス. 尚ホ胞體中=大小ノ空胞アリ. 其ノ多クハ核質流 出=由來スルモノノ如シ.

の°C/8 St. F.R. 前者=類似ス. Cr.Sf.Gr. 肝細胞 ニハ 0.5-2 中大類関形又ハ半月形ノ Sf.Gr. 中等 数ニ出現ス. 顆粒ハ稀ニ核中ニ見ラルモ主トシテ 核膜外側=癒溶シ又ハ核膜ノ肥厚結節トシテ現ハ レ, 半月形又ハ小帽形ヲナスモノ多シ. 尚ホ虚々 ノ星芒狀細胞ニハ移=核ヲ周リテ上記同様ナル顆 粒散在スルコトアリ. 又膽管上皮中ニハ 0.5 中大 ノ Sf.Gr. 数簡核中又ハ胞體中=散在スルヲ見ル. H.-E. 著變ナシ.

22°C/8 St, 37°C/4 St. = 類似.

37°C/8 St. F.R. 肝細胞ノ核稍々淡明=呈色ス. Cr.St.Gr. 肝細胞ノ St.Gr. ハ前者ョリ稍々細小トナル. 肝毛細管内皮下ノ St.Subst. ハ盆々皆量シ,大塊,「ミエリン形」等ラナス. 尚ホ騰管上皮ノ類

粒ハ増大シ又周圍ノ結締織中ニモ小ナル顆粒散在 ス. H.E. 肝細胞核ニ核素厳解ヲ輕度ニ認ム. 星 芒狀細胞ハ核機縮=傾ク.

37°C/12 St. Cr.Sf.Gr. 肝細胞及ビ星芒釈細胞ノ Sf.Gr. ハ前者=類似ス. 肝毛細血管内皮下ノ Sf. Subst. ハ益々増量シ根大ニシテ形不定ナリ.「グ リソン氏鞘」及ビ膣管上皮ニモ Sf.Gr. 増加ス.

o°C/16 St. F.R. 22°C/8 St. =類似. Cr.Sf.Gr. 0°C/8 St. = 比シ顆粒ノ核=接スルモノ稍々少ク, 一般=稍々大ニシテ細胞索ノ邊縁部=多ク, 叉肝毛細管内皮下= Sf.Subst. 可成存スルモ, 組大塊狀ヲ呈シ空胞ヲ有スルモノ多シ. H.E. 核素分離稍々著明, 核質涌出少数,核素流失(Chromatinauslaugung)著明=シテ核素分離ョリ移行スルガ如シ. 核素流失アル部=ハ Sf.Gr. 甚ダ少シ. 之 組織ノ「アルカリ性」强キタメナルベシ.

22°C/16 St. F.R. 22°C/8 St. = 類似. Cr.Sf.Gr. 大體前者ニ類似スレドモ, 肝小葉ノ中心部ニ於テハ肝細胞ノ胞體中ニ多ク現ハル、「ベリツト水」分別ラ行フ=肝毛細管内皮下ノ徴密ナル Sf. Subst. ノミ尚ホ淡紫色ヲ呈ス. H.-E. 肝細胞核ノ核質涌出著明ニレテ涌出滴ハ甚ダ大ナリ. 又核素融解次デ核融解=陷レルモノ多数.

37℃/16 St. F.R 37.℃/8 St. = 比シ肝細胞核ノ 協界稍々不明瞭ト化ス. Cr.St.Gr. 肝細胞ノ胞體中 ニハ 0.5-3 μ大類圓形又ハ稜角性ノ顆粒甚ダ多數 存シ,大ナルモノハ中空性ニシテ,一部ハ核膜ニ 外接シ又一部ハ核内ニアリ. 肝毛細管内皮下ノ St. Subst. ハ肝小葉ノ桑體ニ瀰漫性ニ散在ス.「バ リツト水」分別ニテ St.Gr. ハ其ノ呈色性ヲ減ジ極 ク淡ク紫紅色ヲ呈シ耐酸性物質ハ猶ホ酸紫紅色ヲ 呈ス.「チアチオ染色」ニテ顆粒ハ淡橙黄色ナレド, Sf. Subst. ハ橙赤色ニ染ル. H.-E. 核素分離甚ダ 著明、少数ノ核質涌出アリ.

37°C/20 St. Cr.Sf.Gr. ハ肝小葉中心部ノ肝細胞 胞體中ニハ前者ニ比シ顆粒ハ減少スルモ, 邊線部 ニ至ルニ從ヒ減少著シカラズ. 之ト反對ニ肝毛細 管内皮下ノ Sf. Subst. ハ, 肝小葉ノ邊線部=至ル = 從ヒ減量ス.

の℃/24 St. F.R. 22℃/8 St. =類似ス. Cr.Sf.Gr. 肝細胞素ノ内部=顆粒少ク核ト密着スルモノ亦稀ナリ. 細胞素邊縁部ニハ 1--2μ塊狀境界明瞭ナル 顆粒多数存スルモ, 肝毛細管内皮下ノ Sf. Subst. ハ少シ, H.-E. 核融解, 核素流失ヲ所々群在性ニ見ル.

22°C/24 St. F.R. 肝細胞ノ核一般=可成星色ヲ減ズ. Cr.Sf.Gr. 22°C/16 St. = 類似. F.-R. 核素融解著明.

27°C/24 St. F.R. 37°C/16 St. ョリ可成星色ラ減

ズ. Cr.Sf. Gr. 肝細胞胞體中= 1—2 μ 大類國形

稍々決明紫紅色=染ル Sf. Gr. 数箇—10 数箇散在
シ、大ナルモノハ中空性又一部ノモノハ相集リテ

塊狀=認メラル. 毛細管內皮下ノ Sf. Subst. パ減

量ス. 尚ホ處々=小滴狀ノ耐酸性類脂體現ハル.
「ベリツト水」分別=依リテモ Sf. Gr. ハ其ノ星色
ラ殆ド變ゼズ又「チアチオ染色」=依リテ淡橙黄色
ニ染リ、耐酸性類脂體ハ美麗ナル橙赤色ラ呈ス.

H.-E. 肝細胞核=ハ核素分離ヲ起シ、其ノ多クハ

核素融解大デ核融解=移行セリ. 星芒狀細胞、膽

管上皮及ビ間質ノ核モ亦核悶縮ヲ起ス.

37°C/30 St. F.R. 殆ド全ク消失ス. Cr.Sf.Gr. 肝毛細管内皮下ノ Sf.Gr. ハ殆ド認メラレズ. 肝細胞ノ胞體中=瀰漫性= 1-2 μ 類園形ノ顆粒現ハレ,「パリツト水」分別ヲ施ス=多少其ノ呈色性ヲ減ズルカ又ハ之ヲ變ゼズ. 尙ホ間質=モ 2-4 μ類 園形ノ顆粒瀰漫性=散在スルモ,「パリツト水」分別=テ其ノ呈色性ヲ亢進スルノミ.

腎臓. 直後. F.R. 絲毬體蹄係ノ核ハ核膜及ビ「クロマチン絲」稍々呈色著明. 尚ホモ細管内皮細胞ノ核ハ呈色著明, Cr.St.Gr. 絲毬體蹄係ニハSt.Gr. ヲ認メズ. 細尿管主部ノ曲部ニ於テハ0.5―1 μ 稀ニ 2 μ 大類圓形又ハ稜角性ノ顆粒可成多数散在ス. 直部ニハ殆ド顆粒ヲ見ズ. Henle 氏蹄係ノ廣管部ニハ 1―2 μ 前後ノ大體類圓形又ハ稜角

性ノ顆粒可成多数存立、介在部ノ上皮細胞ハ共ノ 胞體稍々瀰漫性淡紫紅色=染り,2一数μノ種々ナ ル形ヲナセル顆粒多数主トシテ核ノ周園稀=核内 ニアリ、潤管上皮ノ顆粒ハ上記ノモノニ此シ稍々 細小ナリ、

37°C/4 St. F.R. 前者 = 類似. Cr.Sf.Gr. Sf.Gr. ハ前者 = 比シ各部 = 於テ増加増大ス. H.-E. 著變ヲ認メズ.

0°C/8 St. 前者=類似.

22°C/8 St. R.F. 細尿管上皮ノ核一般=呈色蓍明 ナリ、Cr.St.Gr. 主部細尿管上皮ノ St.Gr. ハー般 =組大=シテ屢々管腔内=不規則大塊狀ヲナス. 尚ホ絲毬體路係ル核ノ周図=極メテ微細粉末狀ノ 顆粒数節散在性=出現ス. H.-E. 絲毬體路係ノ毛 細管内皮細胞ノ核蓍明=濃縮ヲ起セリ.

3°C/8 St. F.R. 細尿管一部ノ上皮細胞核ハ稍々 濃縮シテ星色著明ナリ、 Cr.St.Gr. 主部ノ微細ナ 顆粒ノ多クハ融解シ、 細尿管上皮細胞基底部= 4-8ル大ノ小塊ヲ形成ス. 其ノ性狀ハ「ベリツト 水」分別=依リテ星色性ヲ減ジ淡紫紅色=染ル. 「ヘンレー氏蹄係」ノ 廣管部ノ St.Gr. ハ多少耐 酸性ヲ減ズ. H.-E. 細尿管上皮ノ核=ハ核素融解 和々著明=シテ又少数ノ核素流失ヲ認ム.

37°C/12 St. Cr.Sf.Gr. ハ増加セザルモ上皮細胞 ノ胞體中ニテ核ニ近ク一部ノ顆粒核中ニ, 又ハ核ノ大部分ヲ磁ヒテ出現スルモノ多シ.

のC/16 St. F.R. 22°C/8 St. =類似. Cr.Sf.Gr. 顆粒ハ稍々減少シ主部=ハ2μ類関形ノ顆粒其ノ 胞體中=一様=散在シ,又 Sf.Subst.トナリテ胞 體ノ邊緣部=出タルモノモ多シ.介在部上皮ノ微 細ナル顆粒ハ消失シ粗大ナモノ残留ス. H.-E. 主 部ノ上皮細胞ノ核瀔縮著明ナリ.

22°C/16 St. F.R. 略 22°C/8 St. = 類似. Cr.Sf.Gr. 主部ノ胞體中ノ顆粒ハ細小ナレド管腔内或ハ細胞 間=ハ前者ヨリ更=大ナル種々不規則ナル形態ラ ナス Sf. Subst. 山ツ. H.-E. 主部ノ上皮細胞ノ核 機絡セルモノ多シ.

37℃/16 St. F.R. 37℃/8 St. ヨリ稍々星色弱シ. Cr.Sf.Gr. 切片邊緣部ハ可成廣ク全ク染色性ヲ失 ヒ淡明化シ、又一般ニ細胞核ノ輪廓消失シ胞體ハ 瀰漫性溷濁シ腫大ス. 細尿管ノ耐酸性顆粒ハ著明 = 増加シ3-4 μ 大ノ大體類圓形ノモノ多數散在 ス. 顆粒基質ハ粗糙ニシテ其ノ境界餘リ明瞭ナラ ズ. 其ノ分布正常時ト大イニ異ナリ, 上皮ノ基底 或ハ遊離線又ハ核位ノ別ナク一様ニ瀰漫性ニ散在 ス. 併シ乍ラ介在部ニ於テハ主部ニ比シテ顆粒級 密ニシテ且農染スルタメ直ニ之ヲ細尿管主部ヨリ 識別シ得、尚ホ一部ノ細尿管上皮基底部ニ於テ固 有膜=接シテ顆粒ガ輪環狀ヲナシテ排列スルモノ ヲ見ル、H.-E. 主部ノ上皮細胞核ノ多数ノモノニ 核素分離署明トナリ、一部ノモノハ核破壊或ハ核 融解ヲ起ス. 從前ノ諸例ハ核變性著明ナラザリシ ガ本例ハ特ニ書明ニシテ Cr.Sf.Gr. ガ特異ナル像 ニテ多數出現セリ、

37°C/20 St. 細胞核ノ輪解消失シ胞體ハ彌浸性ニ 涸濁腫大ス. Cr.Sf.Gr. 前者ニ比シテ多少減少セ リ. 主部ニ於テハ粗大ナル顆粒ハ胞體ノ邊線部ニ 多ク胞體ノ內部ニハ小ナル顆粒少数ノミ散在ス. 主部以外ノ部ニ於テハ Sf.Gr. 可成減少ス.

o°C/24 St. F.R. 22°CS/8 St. =類似ス.0°C/16 St. = 比シ St.Gr. ハ細小ニシテ其ノ数又減少ス.

H.-E. 核素融解=移行セルモノ多シ.

22°C/24 St. F.R. 和尿管上皮細胞ノ核ハ星色一般ニ淡明ナリ. Cr.St.Gr. 主部ノ直部及ビ介在部ニ 22°C/16 St. =見タルガ如キ粗大ナル顆粒ヲ見ル. 主部ノ曲部ノ St.Gr. ハ細小ニシテ其ノ数モ減少セルモ髄線中ノ主部ニハ, 可成多数存スル場合アリ. H.-E. 核機縮著明核素融解ヨリ核融解ニ陥ルモノ多シ.

37°C/24 St. F.R. 集合管上皮細胞ノ核ノ星色物 ホ稍々著明ナルモ,主部其ノ他ノ細尿管上皮ノ核ハ瀰漫性不鮮明ニシテ霧陽性ナリ. Cr.Sf.Gr. 著減ラ來シ主部ノ顆粒ハ多クハ淡紅色不鮮明ト化ス.介在部ノミハ尚ホ中等數ニ1—3μノ Sf.Gr. 瀰

漫性= 花スルヲ見ル、H.-E. 細尿管上皮ノ核ハー 般ニ濃縮シ瀰漫性= 溷濁セルモ,特ニ主部ニ於テ 폴明.

37°C/30 St. F.R. 前者ョリ其ノ呈色更ニ減弱シ, 殆ド消失ス. Cr.Sf.Gr. 細尿管上皮細胞ノ胞體中 = 0.5-1μ類関形呈色著明ナラザル顆粒稍々多數 瀰漫性=散在シ,「パリット水」分別ニテ其ノ呈色 ヲ殆ド變ゼズ.

第2列賞驗=於テハ尚ホ組織ノ一部ニ「チアチオ氏固定」ラ行ヒ之ニ「チアチオ氏染色」ラ施セリ、其ノ直後ノ所見ハ濱崎氏ガ正常家兎ニ就テ託ニ殺表シタル所ニ一致スルヲ以テ記載ラ省略ス。

心臓. 37°C/8 St. 筋漿中=瀰漫性= 0.5─2 μ 大ノ顆粒中等數=散在ス.

37°C/16 St. 筋原繊維間=境界不鮮明ナル塊狀ノ極ク淡ク橙黄色=染ル顆粒中等數=散在ス.

37°C/24 St. 微細橙黄色ノ顆粒筋原繊維=平行シテ連續的=排列サレ,コレ=伍シテ稍々不整形ナ程赤色=染ル顆粒多數散在性= 存み.

脾臓. 37°C/8 St. 腫大セル網狀織細胞ノ原形質ハ微細顆粒狀橙黄色ニ染ル.

37°C/16 St. 腫大セル網狀織細胞ノ胞體橙黄色 =染ルモノ増加シ,尚ホ主トシテ濾胞ノ諸細胞中 =淡黄色=染ル顆粒少數散在ス.

37°C/24 St. 腫大セル網狀織細胞ノ胞體ハ微細

颗粒狀ニ橙黄色ヲ呈シ, 尚ホ種々ノ大サノ顆粒胞 體中又ハ細胞間ニ存シ癥狀ヲ呈ス.

胃. 37°C/8 St. 腺表面部ノ結締織細胞ノ胞 體ハ微細顆粒狀稍々橙黄色=染ル・主細胞ノ胞體 ノ邊縁部= 2-3μ類圓形ノ顆粒少數存み、

37°C/16 St. 上皮細胞ノ胞體ノ邊線部ニ淡橙 黄色ニ染ル 2-3μ小塊狀ノ顆粒少数アリ.

37°C/24 St. 腺上皮細胞體ノ邊線部ニ粗大ナ顆粒ノ橙黄色ニ染ルモノ多数アリ.

肝臓. 37C/s St. 肝小著 / 邊線部 / 肝細胞 及ビ星芒狀細胞 / 胞體中=小塊狀 / 淡橙黄色=染 ル顆粒少数=アリ.

37°C/16 St. 星芒狀細胞及ビ肝毛細管内皮下ノー部ノ顆粒ハ共ニ橙黄色ニ染ル

37°C/24 St. 肝細胞ノ「ミトコンドリア性」顆粒 ガ多數符黄色=染色サルルヲ見ル.

腎臓. 37°C/8 St. 細尿管上皮細胞胞體中ニ 於テ Ju 前後ノ類圓形ノ橙黄色ニ染ル顆粒 1-2 箇 、散在ス.

37°C/16 St. 細尿管上皮細胞基底部及ビ遊離線ニ 記ム處ニ 1-2 μ 又ハ小塊狀ノ橙黄色乃至淡黄色ノ顆粒中等數=散在ス. 特=介在部上皮細胞ノ顆粒ハ可成多数稍々濃染ス.

37°C/24 St. 主部上皮ノ基底部及ビ遊離線ノ粗 大顆粒ハ橙黄色=染ル.

以上實験成績 ヨー括表示スレパ次ノ如シ.

=					第	1	列	實		ŵ	成	績			第:	2 歹	賞	驗	成	續	
		時	間温度	直	8	時	rij	16	時	fij	24	時	間	直				37 <b>°C</b>			
	臓	器	區及	後	0°C	22°C	37°C	0°C	22°C	37°C	0°C	22°C	3 <b>7°C</b>	後	4 間	8 #	12 "	16 "	20 "	24 "	30 "
Feulgen 氏反應ノ頭サ	٠C.	,	臟	₩	#	#	+	+	+-	+	#	+	±	#	#	₩	+	+	+	+	±
	脾		巌	#	#	₩	#	#	<del>li</del>	+	++	+	+	₩	Hr	thr	#	#	#	+	+
	淋	巴	腺	#	₩	₩	₩	Hi	+	#	+	+	+								
		胃		╁	#	₩	#	#	+	+	+	+	+	#	#	+	+	+	+	+	±
	肝		臓	#	#	#	╁╴	╁	+	+	+	+	+	#	#	+r	+	+	+	+	±
Fe	肾		臓	#	Ħ	₩	₩	<del>llr</del>	#	+	#	++	++	,#	#	#	#	#	#	tr	tr

					第	1	列	Ţ	i A	肏	成	縦			第	2 <i>§</i>	1 強	驗	戍	繢	
	時間 温度		直	8	時	間	16	時	[6]	24	時	間	直				37°C				
	臓	器	(in the	後	0°C	22°C	37°C	0°C	22 <b>°C</b>	37°C	0°C	22°C	37℃	後	4 開	8 "	12 "	16 "	20 "	24 "	30 //
枕」	心		臌	₩ı	₩	###	1111	Hir	###	₩	#	+	+	₩	Ħ	HIr	₩.	Hh	#	+	±
耐酸性顆粒」	脾		臟	tr	₩	₩	₩r	₩	<u>.</u> ##	#	╁	+	+	+	+	##	##	Hr.	#	+	-
郵便	林	면	腺	+r	#	₩	Hr	+	+-	#	#	#	+-								
٠,		胃		╁	₩	₩	##	#	#	+	₩	#	+	+	#	₩	#	#	+	-	±
1047	IF		臌	+	+	#	##	Ħr	₩	₩	₩	#	+	#	Ħ	₩	₩	.Hr	#	╁	±
	腎		巌	₩	₩	₩r	ĦĦr	₩	HHr	###	₩	#	+	#	##	Шт	#	##	##	#	+

	cciu 染色	第	2 3	」 實	驗					
時	間温度	直	37°C							
		後	8 時間	16 #	24 "					
ıù	臓	+	+	#	<del>llı</del>					
脾	臌	+	+	#	#					
F	3	т	+	#	#					
肝	臓	+	-	+	#					
脀	臌	+	+	+-	+					

#### 總括及ビ考接

第1列實驗及ビ第2列實驗ヲ總括スル=保存時間並=温度ヲ同ジクスル各例ノFeulgen反應ノ强サ及ビ「ク・耐酸性顆粒」数ハ・多少ノ動搖アルモ,大體同種組織=於テハ組織所見ハ互=類似セルヲ認ム・Feulgen 反應ハ 4―8 時間=於テ反應多少亢進ノ傾向ヲ示スモノアルモ,其ノ後ハ漸次反應をす減ジ此時期=於テ最モ「ク・耐酸性顆粒」多數核ノ內外=於テ著明=現ハレ,然ル後時間ノ經過ト共=漸次減少シ、之=代リテ耐酸性類脂體出現シ漸次增加ス・此類脂體ハ大サ均整小球狀ノ顆粒トシテ現レ、原形質顆粒(例ヘバ「ミトコンドリア性顆粒」)ヲ思ハシムルモノ多シ、又反之、「ク・耐酸性顆粒」)ヲ思ハシムルモノ多シ、又反之、「ク・耐酸性顆粒」)ヲ思ハシムルモノ多シ、又反之、「ク・耐酸性顆粒」自身ガ類脂體ヲ吸剤シテ漸次滴狀ノ、

「バリツト水」=抵抗强キ類脂體顆粒ト變ズルモノアル可キハ, 既=病理的=ハ屢々, 又生理的=ハ稀=認メラレシ所ナリ、吸着セル類脂體ノ循ホ少量ナル時ハ形態學的=著變ナク, 唯「ベリツト水」分別=對シテ幾分抵抗ヲ現ハス=過ギズ、類脂體 耐々增量スル時ハ「ク・耐酸性顆粒」ハ圓形トナリ、「バリツト水」分別後ハ星色多少減弱スルモョク類 粒ノ境界ヲ認メ得、類脂體甚ダ多量=吸着サルル時ハ顆粒ハ滴狀トナリ、「ベリツトホ」分別=ヨル 呈色度=變化ヲ起サザルカ、或ハ反ツテ星色度ヲ 増温スルモノナリ、

心筋ニ於テハ「ク・耐酸性顆粒」ハ時間ノ經過及ビ温度ノ上昇ト共ニー且著明ニ増加スルモ、末期ニ於テ著減ヲ來シ、同時ニ耐酸性類脂體ノ多量ニ出現スルヲ認ム、コノ耐酸性類脂體ハ甚ダ微細美麗ナル顆粒トシテ殊ニ著明ニ出現ス、コノ顆粒ノ由來ニ就テハ種々疑問存スルモ、其ノ大サ排列等ヨリシテ心筋ノ「ミトコンドリア」ト見做サルベキリシテ心筋ノ「ミトコンドリア」ト見做サルベキレタルモノナルベシ、筋繊維縦斷面ニ於テ耐酸性類脂體顆粒ハ横紋ニー致シテ現レ、又筋繊維ノ横斷面ニ於テハ Cohnheimsches Feldchenニー致スル分布ヲ示スコトハ此ノ想像ヲ裏書キスルモノナリ、尚ホー方耐酸性顆粒ニシテ類脂體ヲ頽ペナナリ、尚ホー方耐酸性顆粒ニシテ類脂體ヲ頽ペナル程度ニ吸着シタルモノモ混在スルモ、上記ノ如ク「バリット水」分別ニ對スル態度ニョリテ之ヲ眞

性ノ耐酸性顆粒或ハ耐酸性類脂體ナルカヲョク區 別シ得.

脾臓ニ於テハ 8-16 時間ニ減胞ノ邊絲部、 監索 及ビ籫ノ淋巴細胞、單核細胞及ビ網狀織細胞ニハ 甚ダ美麗ナル 0.3-0.5 g 大ノ耐酸性顆粒多數ニ出 現シ、油浸ニテ檢スルニ顆粒ハ核膜ノ内外ニ酸生 シ、漸次増大シテ小滴狀ト化シ、核膜ヲ離レテ胞 體中へ移行スルヲ見ル. 尚ホ少数乍ラ微細顆粒ノ 核内ニ遊離シテ存スルヲ見ルコトアリ、顆粒形成 ノ初期=於テハ當該核ハ瀰漫性淡紅色ヲ呈シ多少 耐酸性ヲ亢進スルモ、顆粒形成進ムトキハ核基質 ハ漸次褪色シテ硝子様ノ光澤色調ヲ現スニ至ル。 尙ホ顆粒ハ核ヲ遠ザカルニ從ツテ増大シ, 一部ノ モノハ細胞外=移行スルモノノ如シ.上記現象ハ 一般ニ淋巴細胞ニ蓍明ニシテ、網狀織細胞ニハ蓍 明ナラズ, 又單核細胞へ崩者ノ中間ニ屬ス.「パリ ツト水」分別ヲ施スニ上記顆粒中核ト密接ナル關 係ニアル顆粒ハ呈色ヲ失フ. 反之, 核ヨリ離レタ ルモノ就中稍々粗大小滴狀ニシテ胞體ノ邊線ニ存 スルモノ及ビ細胞間ニ移行セルモノハ、コノ際呈 色性ヲ亢進ス、注意スペキハ上配兩種ノ顆粒ハ明 瞭=延別シ得ルニ非ズシテ、互=多数ノ移行型ヲ 有スルコトナリ、之等所見ニヨリ此ノ時期ニ於テ 發生スル「ク・耐酸性顆粒」へ、 發生初期ニ於テハ 定型的ナ「ク・耐酸性顆粒」ナルモ, 爾後原形質ト 密接ナル關係ヲ生ズルニ至レバ、原形質内ニ増量 セル類脂體ヲ吸着シテ「バリツト水」ニ稍々抵抗强 キ顆粒トナリ,更ニ類脂體ノ増量スルニ及ビテ全 ク耐酸性類脂體 =: 化スルモノナルペシ、上記興味 アル所見ヲ呈セシ部ヲ「ヘマトキシリン―エオジ ン染色」ニテ檢スルニ,コノ部ノ淋巴球ノ核ハ核濃 縮ノ末期ニ在リテ、核邊緣部ノ核素ハ融解シ始メ、 又一部ノモノニテハ核融解ノ初期、尚ホ少数ノモ ノハ核融解ノ末期ニ在リテ, 核ノ輪廓ハ辛ウジテ 認メ得ルニ過ギズ.

腸間膜淋巴腺ノ所見ハ脾臓ト大同小異ナルモ, 此部ニ於テ末期=現ハル後細小満狀ノ耐酸性類脂 體顆粒ハ「ミトコンドリア」ト關係アルヤモ計り難 キモ、健常淋巴球ニハ「ミトコンドリア」甚ダ不明 瞭ナルガ故ニ、恐ラク乳糜淋巴ノ脂肪ヲ多量ニ合 有スル事ガ本顆粒ノ発生ニ關係ヲ有スモノナルペ シ

胃ノ粘膜ニ於テハ耐酸性顆粒ノ消長ハ甚ダ動搖 アリ、コレ粘膜ニハ種々ノ消化酵素ノ存スルタメ 及ビ胃内容中ニ在スル雑菌等ノ影響ニョルモノナ ルベシ、 8-12 時間ニ於テ壁細胞核ニ非常ニ蓍明 ナ核濃縮ヲ起シ、其ノ内部ニ瀰漫性ニ多量ノ耐酸 性物質ヲ生ジ、後之等ノ核ガ核分裂破壊ニ移行ス ル際ハ多数ノ微細ナ耐酸性顆粒トシテ胞體内ニ移 行ス. 核濃縮=陥レル核ハ通常核破壊ニ終ルモノ ナルモ、狀況ノ變化ヲ起ス時ハ一旦濃縮サレタル 核染色質ハ再ピ水分ヲ吸收シテ膨化融解ヲ起スコ トアリ. 主細胞ニ於テハコノ現象ヲ屢々認メ. 斯 カル際ハ核内耐酸性物質ハ融解サレテ胞體中ニ移 行シ. 顆粒ヲ形成スルコト稀ナリ. 又主細胞ノ核 ハ壁細胞ノ核ヨリモ後レテ而モ輕度ノ核濃縮ヲ起 シ,耐酸性物質或ハ顆粒ヲ酸生セシムルコトモ亦 後者ノ如ク著明ナラズ。尚ホ胃ノ粘膜中ニ發生ス ル耐酸性顆粒ハ速ニ耐酸性頻脂體ニ變ズルハ特異 ナル所見ナリ. コレ耐酸性顆粒ハ主トシテ壁細胞 中ニ生ジ、浦モ其ノ胞體ノ「エオジン嗜好性預粒」 ハ類脂體ヲ含有シ、殊ニ保存實驗ノ際ニハ類脂體 ハ著明ニ増量スルタメニ, 核ヨリ段生スル耐酸性 顆粒ト合シテ速ニ耐酸性類脂體ヲ形成スル爲メニ 依ルモノナルコト疑ヒノ餘地ナシ.

肝臓=於ケル核ノ自家融解ハ稍々速=進行シ, 8—12時間=於テ耐酸性顆粒ハ最モ増加スレドモ, 蓍シキ變化ハ肝毛細管內皮下=大小ノ種々ナ形ヲ 呈セル耐酸性物質多量=川現スルコトニシテ,始 メハ肝小葉ノ邊縁部=多量=現レ,後漸次中心部 ニモ川現シ且其ノ形態稍々小形トナル.

腎細尿管上皮ノ各部ニ於テハ甚ダ特異ナ所見ヲ 示スモノニシテ主部ニ在リテハ 8--12時間ニテ耐 酸性顆粒ノ著明ナ増加ヲ見ルノミナラズ, 顆粒ハ コノ時期ニ於テ最モ明カニ內生的所見ヲ示ス. 更ニ時間ヲ經過スル時ハ個々ノ顆粒ハ融合シテ粗大ナ顆粒トナリ,和尿管腔及ビ固有膜ニ近ク1列ニ並ブ耐酸性物質トナルモノ多シ. 反之,介在部ニ於テハ顆粒ハ多数増加スルモ,融合ヲ起ス傾向少ク,時間ノ經過ト共ニ胞體內ノ大ナルモノハ「パリツト水」分別ニョリテ其ノ呈色性ヲ變ズルコト少キ顆粒トシテ殘留ス.

Carl Oppenheimer = 依レベPolynucleotidasen ハ殆ド到ル處ニアリ. 又 Nucleotidasen ハアラ ユル臓器及ビ血液中ニ存在シ, Nucleosidasen ハ唯一定ノ臓器内ノミニ存スルト云フガ, 勿論 其ノ量的=相異アリ、 Juschtschenko ニ依レバ Nuclease ハ脾, 肝, 腎等ニテハ多量ニ, 淋巴腺 ニテハ比較的少量ニ、心臓ニテハ少量ニ存スト報 告セリ. 組織内ノ自家融解ノ殆ド全過程ガ, 上記 ノ如キ核蛋白分解酵素ニ依りテ進行スルモノナレ パ, 其ノ含量ノ多少ガ同一條件ニ於テハ核蛋白ノ 自家融解過程ノ進行時間ニ關係アルコトハ 勿論 ナリ、併シナガラ他面自家融解過程ノ進行速度ガ 其ノ細胞核 (殊ニ核膜) 蛋白固有ノ抵抗ニ依リテ モ、一定度迄左右サルベキハ疑ヒナシ、著者ノ實 験ニ於テ「ク・耐酸性顆粒」ノ内生的ニ核蛋白ョリ 著明ニ發現スル時間ハ, 大體 8 時間ヨリ 16 時間 前後ナリ、 卽チ肝、 脾、 胃、淋巴腺等ニ於テハ 8-12時間 (37℃), 腎, 心=於テハ 12-16 時間 (37°C)=於テ著明=發現スルヲ認メタリ、而巳ナ ラズ此温度時間=於テハ, 顆粒ハ核内及ビ核附近 - 最モ多ク認メラル、 爾後時間ノ經過ト共ニ漸次 「ク・耐酸性顆粒」の核ヲ離レ, 胞體ノ邊緣部ニ現の レルモノ多ク且粗大トナリ、大多數ノ顆粒ハ漸次 増量スル耐酸性類脂體ト融合シテ「パリツト水」分 別=其ノ星色性ヲ減ゼザル顆粒トナリ,又「ヂアチ オ染色」ニテ橙黄色ノ色彩ヲ増ス顆粒トナリテ在 シ,24時間ヲ經過スル頃ヨリ斯カル顆粒モ亦漸次 減少ヲ來シ,30時間ニテ殆ド全ク消失ス、尚ホ對 照トシテ試ミシ「チアチオ固定」及ビ同染色ニ於テ

ハ本顆粒=顆脂體染色甚ず著明ナリ、他方 8─12 時間ハ核=退行變性ヲ認メ始ムル時間=一致シ, 「ヘマトキシリン―エオジン染色」ニテ實質細胞ノ 核=種々變性ヲ認ム、併シ間質ノ核ハ, コレヨリ 稍々遅レテ變性ヲ來シ, 主トシテ核濃縮ヲ起ス.

Feulgen ノ反應ハ初期ニ於テハ,反應ハ一時增 孤スルコトアルモ, 時間ノ經過ト共ニ漸衣減弱ノ 傾向ヲ示スモノナリ. 而シテ「ク•耐酸性顆粒」が 著明ニ現ハレタル後、同反應ノ増强スルコトハ決 シテナシ. 囊ニ Feuigen ハ核酸反應ヲ單ニ動物 核酸反應ナリト解セシモ、最近濱崎氏ハ本反應ハ Nucleoproteide トシテ 存スル核酸ノ呈色反應ヲ 起スモノニシテ、遊離核酸ハ本反應ニ與ラズ、反 之、「石炭酸フクシン沃度法」ハ Nucleoproteide 中ニ存スル核酸ニ星色反應ヲ起サシメズシテ。游 離セル核酸ノミニ本反應ヲ起サシムルモノナリト 主張シ、之ヲ化學的竝ニ組織化學的ニ證明セリ、 著者ノ本實驗成績ヲ通覽スルニ, Nucleoproteide ノ分解シ遊離核酸及ビソレ以下ノ分解産物ヲ生ズ ル時間的階程ガ, Feulgen 反應漸次減弱シ「ク・耐 酸性顆粒」及ビ銅・汞・耐酸性顆粒(後2者ハ2篇 ニ於テ述ブ)ノ順ニ出現増加シ,且又コノ順序ニテ 夫々遞減スル時間的超過ニー致シ、決シテ之等額 序ノ顚倒ヲ來スコトナカリシハ, 濱崎氏ノ見解ヲ 裏書キスルモノナリ、且濱崎氏ニ依レバ Feulgen ノ反應ノ强サハ。 當該細胞核ノ Vitalität = 凡ソ 一致スルモノナルコトヲ明カニセルガ,著者ノ實 験ニ於テモ組織細胞ノ Vitalität ノ減弱 (卽チ時 間ノ経過)ト共ニ、 Feulgen 反應ノ遞減スルヲ證 明シ得タリ、併シナガラ、脾及ビ淋巴腺ノ濾胞, 胃ノ主細胞, 腎ノ集合管上皮細胞ノ一部=於テ, 其ノ核ハ酸縮ニ陷リ長ク Feulgen 反應陽性ニシ テ,24時間以後ニ於テモ微弱ナガラ其ノ星色性ラ 保有スルモノアリ. 尚ホ各種騰器ノ間質結締総細 胞核ニ於テモ同様ノ所見アリ. 斯ノ如ク質質細胞 ノ種類ヲ異ニスルニ從ヒ, 又腎臓ノ如ク同一臓器 實質細胞ニ於テモ形態學的竝ニ機能的ニ異ナレル

細胞ノ核ハ、夫々 Feulgen 反應及ビ「石炭酸フ クシン沃度法」ノ所見=可成大ナル相違ヲ示スモ ノナルヲ知ル、コレ恐ラク各細胞核ノ核蛋白分解 ハ、各自胞體内=蔵スル酵素ノ作用=因ルガタメ ナルペク、組織細胞ノ種類=依リテ Nuclease 其 ノ他核蛋白分解酵素ノ量並=種類=相違アルコト ハ、 旣=述ペタルガ如ク、 Carl Oppenheimer、 Justehtschenko 等ノ證明セシ所ナリ、 從ツテ肝、 腎等ノ如ク酵素ヲ多量=存スル實質細胞核ハ、一 般= Feulgen 反應及ビ「石炭酸フクシン沃度法」 ハ速ニ陰性ト化スルモノナリ、 尚ホ實驗操作其ノ 他ノ條件=ヨリ核蛋白ノ脱水が强度ニ起リ、蛋白 ガ優固狀態=陷レル際=ハ、其ノ分解が抑制サル ルコトアルペキハ想像ニ難カラズ.

最後=温度ノ相違ノ自家融解=及ボス影響=關シテハ、Carl Oppenheimer =依レバ温度 10°C 昇ル毎=反應速度ハ 2—3 倍增强サルモノナリト云フ、余ノ第1列實験=於テモ同一時間=テ (0°、22°、37.C) =保存サレタル臓器組織ノ Feulgen 氏反應及ビ耐酸性颗粒ノ出現増加ノ程度ハ、37°C 最モ速ニシテ且著シク、0°C 最モ遅クシテ微弱ナルプ認ムルヲ得タリ・

欄筆スルニ當り田村教授立ニ濱崎助教授ノ 御校閱ト御指導ニ對シ深謝ス. 尚ホ生化學山 崎助教授ノ御助言ニ滿腔ノ謝意ヲ表る.

#### 文

燩

1) S. Amberg u. W. Jones, Hoppe-Seyer's Ztschr. f. Physi. Chemie, Bd. 73, S. 407, 1911. 2) Dietrich, Verh. d. Deuts. path. Gesellschaft, Bd. 6, 7, S. 81, 1904. 3) Feulgen, R., Hoppe-Seyer's 'Ztschr. f. Physi. Chemie, Bd. 135, S. 203 u. 249, 1924. 4) Fodor, Das Fermentproblem, S. 48, 1929, Dresden und Leipzig. 5) Goldmann, Fortschritte der Medicin, VI, 1888; z. n. Dietrich. 6) Hamazaki, Jap. Journ. of med. Scien. V Pathology, 1938; 濱崎, 日新醫學, 第24年, 第2號, 昭和10年2月; 第 25年, 第3號, 昭和11年3月; 第25年, 第4號, 昭和 昭和11年4月; 第25年, 第8號, 昭和11年8月; 第 26年, 第11號, 昭和12年11月; 第27年, 第6號, 昭和 13年6月; 岡醫雜, 第49年, 第5號, 昭和12年5月;

日本病理學會雜誌, 第28卷, 1938. 7) Jacoby, Zschr. phys. Chem., Bd. 30, S. 149, 1900; z. n. Dietrich. 8) Juschtschenko, Biochemi. Ztschr., Bd. 31, S. 377, 1911. 9) Kraus, Arch. f. exp. Path. u. Ph., Bd. 22, S. 174, 1887. 10) Levene, Die Fermente u. ihre Wirkungen, Bd. 1, S. 762, 1925. 11) C. Oppenheimer, Die Fermente u. ihre Wirkungen, Bd. 1, S. 150, u. 771, 1925. 12) Salkowski, Zschr. kl. med., 17, Suppl. Bd., S. 77, 1890; z. n. Dietrich. 13) Schmaus u. Albrecht, Virchows Archiv, Bd. 138, Supplementheft, S. 1, 1895; Ergebnisse der allgemeinen Pathologie, Bd. 3, S. 470, 1896.

#### 附圖說明

Fig. 1. 質驗動物番號 3. 心臓、37°C/8 St. 「ク・耐酸性顆粒」證明法・心筋核ヲ磁ヒ粗大ナ耐酸性顆粒(G.)ノ山現シ筋漿中ニモ耐酸性顆粒均加ス・

Fig. 2. 實驗動物番號 1. 胃. 22°C/16 St.

「ク・耐酸性顆粒」證明法「ヘマトキシリン」核染 色ヲ施セリ.

整細胞ノ核ヨリ- 競芽状 = 原形質 = 移行シ (G<sub>1</sub>) 又胞體ノ邊線部及ビ開質内 = 不整租大顆粒ヲ多數 = 見(G<sub>2</sub>). (B.) ハ壁細胞. (H.) ハ主細胞, (I) ハ間質結締織ノ核ヲ示ス. Fig. 3. 賞驗動物番號 4. 肝臓. 37°C/12 St. 「ク・耐酸性顆粒」證明法・肝細胞ノ胞體中=「ク・耐酸性顆粒」増加シ且肝小葉ノ邊線部=於テ毛細管內皮下=粗大耐酸性物質(S.S.)ノ出現セルヲ見ル、尚ホ膽管上皮及ビ Glisson 氏鞘ノ結締織中=モ耐酸性顆粒ハ増加ス.

Fig. 4. 實驗動物番號 6. 脾臟. 37°C/8 St. 「ク・耐酸性顆粒」證明法. 脾索ニ於テ脾縮細胞, 資內皮細胞及ビ網狀縫細胞 (R.) 等 = 耐酸性顆粒 増加セルヲ見ル.

Fig. .5. 寅駿動物番號 1. 腸間膜淋巴腺. 37°C/16 St. 「ク・耐酸性顆粒」證明法. 髓質組織 細胞胞體ノ邊緣部ニ後細滴狀ノ耐酸性類脂體顆粒 多数ニ出現ス. (S.W.) ハ Sinuswand ラ示ス.

Fig. 6. 實驗動物番號3. 胃. 22°C/16 St. 「ク・耐酸性顆粒」證明法、壁細胞ノ核內及ビ核壁ニ於テ小塊狀ノ耐酸性顆粒多數ニ發生ス (Gr.),自家融解ノタタニ壁細胞,主細胞ノ境界ハ消失シ瀰漫性ニ微細ナル耐酸性顆粒散在ス.

Fig. 7. 實驗動物番號 1. 腎臓. 37°C/16 St. 「ク・耐酸性顆粒」證明法. 細尿管介在部(Z.)ノ胞體中=稍々境界不明瞭ナル「ク・耐酸性顆粒」多數 瀰漫性=出現セルヲ見ル.

Aus dem Pathologischen Institut der Medizinischen Fakultät Okayama (Vorstand: Prof. Dr. Oto Tamura).

Über die experimentelle Erzeugung der Hamazakischen säurefesten Granula und einige Beiträge über die Karyopathologie.

(I. Mitteilung)

Aseptische Aufbewahrung der frischen Gewebe.

1.) Beziehung zwischen Cr-säurefesten Granula und Feulgenscher Reaktion.

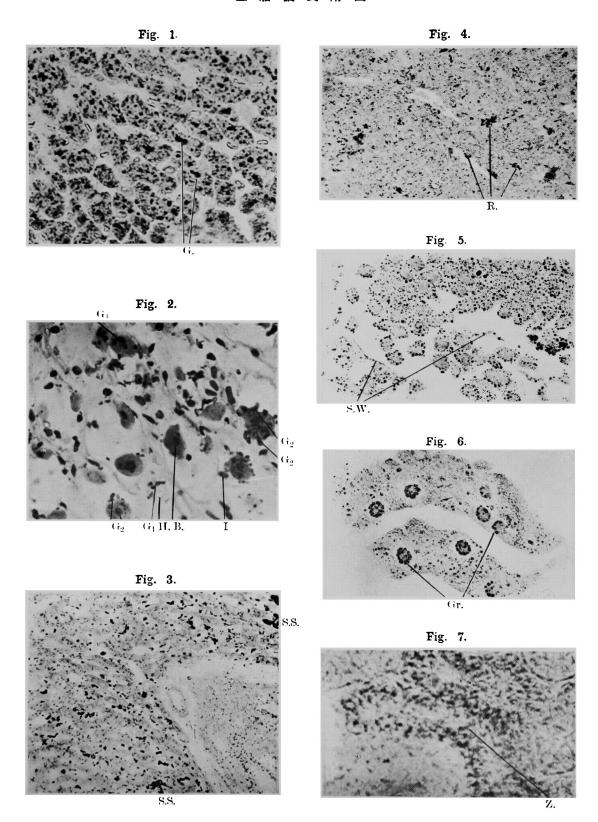
Von

Dr. Kanichi Mihune.

Eingegangen am 31. August 1938.

Eine Art Autoferment, welches nach dem Tod des Organismus Kerneiweiß abbaut, ist schon von Salkowski, Schmaus und Albrecht u. a. experimentell nachgewiesen worden. Es spaltet Nucleoproteide und Purinkörpern in aseptisch aufbewahrten frischen Geweben. Hamazaki behauptet, daß die Cr., Cu- und Hg-säurefesten Granula jedes für sich hauptsächlich aus Purinderivaten von freler Nucleinsäure bis zu Purinbasen bestehen und daß

## 三 船 論 文 附 圖



das Feulgensche Nuclealreaktion ergebende Kerneiweiß nicht anderes als mit Proteinen verbundene Nucleinsäure ist. Verfasser wünschte die Beziehung zwischen den Nucleoproteidabbauprozessen durch die Fermente, welche in den frischen Geweben sind, und dem Schicksal der oben genannten 3 säurefesfesten Granula experimentell zu untersuchen. Als Material benutzte er Herz, Milz, Lymphdrüsen, Magen, Leber und Niere von gesunden Kaninchen. In der ersten Untersuchungsreihe bewahrte er die alle Organe bei 0°, 22°, und 37°C auf, fixierte sie nach 8, 16 und 24 Stunden durch das Fixationsmittlel für Cr., Cu-und Hg-säurefeste Granula und untersuchte jedesmal die säurefesten Granula und Feulgensche Reaktion. In der zweiten experimentellen Untersuchungsreihe untersuchte er die oben angegebenen Organgewebe, welche bei 37°C aufbewahrt wurden, alle 4 bis 30 Stunden, um das zeitliche Verhältnis genauer als bei der ersten Untersuchungsreihe zu betrachten. Um die Beziehung zwischen säurefesten Granula und Lipoid klarzustellen führte er zugleich das Ciacciosche Fixationsverfahren und Färbung aus.

Die Resultate des Experiments seien hier zusammenfassend angegeben. Obgleich die Vermehrung der Cr-säurefesten Granula mehr oder weniger zeitliche Schwankungen aufwies, so kann man doch sagen, daß sie im allgemeinen nach 8~16 Stunden (22~37°C) am deutlichsten ist, d.h. nach ungefähr 12~16 Stunden in Herz und Niere, aber nach ungefähr 8~12 Stunden in Milz, Lymphdrüsen, Magen und Leber. Die Cr-säurefesten Granula lassen sich nach der genannten Zeit im Protoplasma oder in der Umgebung des Kernes erkennen. Später vermindern sie sich allmählich in der Umgebung des Kernes und treten mehr in der Peripherie des Zelleibes auf, wo sie allmählich mit dem Lipoid, welches sich bei der Autolyse auch deutlich vermehrt, zusammenfließt, um schließlich zu säurefestem Lipoid zu werden. Letzteres färbt sich durch die Karbolfuchsinjodmethode rötlichviolett, durch das Ciacciosche Verfahren orangegelb, und zeigt gegen Differenzierung durch Barytwasser auffallenden Widerstand. Nach 20 Stunden verringert sich dieses säurefeste Lipoid allmählich auch und ist nach ungefähr 30 Stunden kaum mehr nachzuweisen. Bei der Hämatoxylineosinfärbung treten regressive Veränderungen der Zellkerne ebenfalls ungefähr nach 8~12 Stunden auf. Eine immer deutlicher werdende Abschwächung der Feulgenschen Reaktion tratekurz nach dem Versuch auf, abgesehen von einer vorübergehenden Reaktionssteigerung im ganz früheren Stadium. Zu bemerken ist dabei, daß die Reaktionsstärke mit der Vermehrung der Cr-säurefesten Granula immer herabgesetzt worden ist. Nach ungefähr 30 Stunden zeigen sich regressive Kernveränderungen sehr deutlich und die Feulgensche Reaktion fällt sehon früh negativ aus. während die Färbbarkeit durch Hämatoxylin noch weiter abnimmt. (Autoreferat)